新型コロナウイルス
子どものいのち ②

本願寺派総合研究所
上級研究員 岡崎 秀麿

新型コロナウイルス感染症拡大にともなう緊急事態宣言下の４月14日に女優の杏さんが、ギターを抱えて弾き語りをする動画をインターネット上に投稿されました。この時歌われていたのが、フォークシンガー加川良さんが昭和45（1970）年８月８日に発表した「教訓Ⅰ」でした。

50年前の安保闘争に揺れていた時代に発表された「教訓Ⅰ」は、「反戦と平和」への思いを込めたものであり、現代の状況にはあてはまらないように思えます。しかし、杏さんの動画には多くの反響が寄せられました。それは、杏さんが動画とともに発信されたメッセージ、

「自分のことを守ることが、外に出ざるを得ない人を守ることになる。利己と利他が循環するように、一人ひとりが今、できることを」

を、多くの方々が新型コロナウイルス感染症によって生じた状況と、歌詞を重ね合わされたからだと思います。また、杏さんの動画には小さなお子さんが自然と映り込んでいました。杏さんに３人のお子さんがいらっしゃるのはよく知られていますので、おそらく杏さんの動画やそこで歌われた歌詞から、「自分のいのち」、そして「子どものいのち」を考えられた方が多かったのではないでしょうか。そのことが杏さんの「利己」「利他」、自分自身の命を大事にすること、それはそのまま誰かの命を大事にすることになるのだから、今は苦しくとも、つらくとも一人ひとりができることをやっていこう、というメッセージへの共感にもつながっていったのだと思います。

もう一曲触れたいと思います。それは、「しゃぼん玉」です。「しゃぼん玉」は、大正11（1922）年に発刊された仏教児童雑誌「金の塔」で詩が発表され、翌年に曲が発表されています。作詞は、童謡・民謡作詞家の野口雨情（1882-1945）です。「しゃぼん玉」の歌詞の由来については諸説ありますが、「野口雨情記念湯本温泉　童謡館」のホームページには、「しゃぼん玉」は、「幼くして亡くなる子供の死を悼んでこの詩を書いたのは明らかです」とあります。詩が発表される数年前には、日本国内で約45万人が亡くなり、20世紀最悪のパンデミックともいわれる「スペイン風邪」が流行していました。野口氏が日本中、世界中で多くの子どもが亡くなっていく状況を見ながら「しゃぼん玉」を作詞したと考えることもできるのではないでしょうか。

新型コロナウイルス感染症の脅威はいまだにおさまっていません。そうした中、日本では、大雨、台風などの災害が頻発する中で、新型コロナウイルス感染症拡大の新たな危険性があるなど、いまだ予断を許さない状況にあります。

私たちの「いのち」が、「しゃぼん玉」のようにはかないことは、大人も子どもも変わりません。しかしながら、「子どものいのち」を守り、育んでいくことができるのは「大人」しかいません。だからこそ、「子ども」のために私たち一人ひとりができることを考えていかなければならないのではないでしょうか。